

や やるぞ～ ま まけないぞ～ が がんばろうぜ～ た 楽しい学校になるように

先生 反省してください！

～「カッコいい」シリーズ ②～

私が以前顧問をしていた女子バドミントン部の部長だった子の話である。

その中学校は、伝統的に部活動がとても盛んで、県内屈指の部活動強豪校として、県内にその名が轟いていた。

私が赴任したのは30歳手前の頃だったが、着任早々、先輩の先生方から様々な過去の逸話を聞かされた。

「昔は、部活動の大会の慰労会の宴席は、成績が良かった部活動の顧問から順に校長先生に近い席に座るのが慣例だった。」「昔は、全国大会から戻ってくると、町をパレードしたんだ。」「昔は、休日の練習を朝の5時ぐらいいからやっていた部もあった。だから、子どもたちは、3食分の弁当を持参していた。一日練習をするわけだから、朝昼晩の3食分だ。」

『昔』と言ったって、何も明治や大正の頃の話ではない。その話を聞いた時から遡れば、つい十年前、二十年程度の前の話のことだ。保護者も含めて同じようなことを複数の人が言っていたから、本当ことだったのだろう。

私が赴任した当時は、ひと昔前のような部活第一というほどではなかったが、それでも、全国大会・北信越大会出場歴の顧問の先生は実際たくさんいて、その学校を、「部活の〇〇中」と呼ぶ教育関係者も少なくはなかった。確かにそう呼ばれるだけの息吹や驚きの光景があちこちに垣間見えた。

例えば、女子バレーボール部の顧問は、修学旅行に部員に一つずつボールを持たせて、夕食前の宿泊ホテルの中庭でパス練習を課していた。柔道部の顧問は、修学旅行先である東京の班別学習の見学先に、必ず「日本武道館」を組み込めと3年生の部員に厳命した。剣道部では、全国大会が近くなると授業間の10分休みごとに、教務室前の廊下にメンバーが集合してきては、静かにさっと円陣を組んで誰かが何かを囁くとさっと散っていく“儀式”が毎日続けられた。男子バレーボール部の顧問は、町の総合体育館の練習割当を勘違いして活動場所がないとわかると、その日の割当で既にバドミントン部が練習していたにもかかわらず、3面のコートで練習するバドミントン部員の頭越しに、サーブ練習を始めさせたこともあった。

もちろん、それらの部活動の顧問はその競技では名の通ったカリスマ的指導者であるとは言え、それぞれ身勝手にわがままなことをしていたものだ。ここまでやる必要があるのか？こんなことまでさせるか？と驚きの連続だった。今なら完全なブラック過ぎるブラックだ。一方で、スポーツは当たり前のことをやっていたには勝てないのだとも痛感したものだ。

部ごとに部室があって、校舎内はランニングの周回コースがとれるなど環境も整っていた。自校給食は巷の食堂並みに美味しい上に牛乳の量は250mmで、全体的に生徒の体格も良かったような気がする。

全盛期から比べれば部活動も下火になったと囁かれていたその頃だったがそれでも、自分が3年担任だった年は、全国大会に4競技、北信越大会に7競技駒を進め、県大会出場できなかった部は1つくらいだと記憶している。教務室前に、賞状、優勝旗やカップ・トロフィーが、所狭しとずらっと並んだ光景は、まさに壮観だった。

今では考えられないような部活事情の中、自分もそれなりに頑張っていたつもりでいたが、教職についてまだ間もない駆け出しで、競技経験もないバドミントン部の顧問として、部活動指導も未熟で悪戦苦闘の日々だった。

そんな学校なので、毎年4月の新入生勧誘にも熱が入る。各部、あの手この手を使って、1年生を自分の部に引き込もうと躍起になった。

ある日、我が女子バドミントン部の3年生の何人かが、2年生のF子を厳しく注意してほしいと訴えてきた。「私たちが一生懸命新入生の勧誘しているのに、F子は、1年生に『うちの部なんか入らない方がいい。練習はきついし休みはないし、優しい先輩は少ないし、先生は怒鳴ってばかり。』なんて言って、体験入部に来た1年生の面倒をしっかりとみないでサボってばかりです。うちの部の評判が悪くなるばかりです。どうかかしてください。」

その話を耳にした瞬間、自分も怒り心頭に達した。その日の部活動の終わりにみんなが整列すると、F子を厳しく問い詰めた。大筋3年生の言っていた通りだったので、「バカヤロー、ふざけるな。そんな風に思ってたんだらお前の方がこの部をさっさと出ていけ！」と、体育館いっぱい響きわたる大声で、F子を面罵した。

さて、その直後、F子はどうしただろうか？いや、どうなっただろうか？

実は、その場にバタッと倒れた。そして気を失ったのだ。そればかりではない。失禁したのだ。私は、正直あっけにとられて、初めは何が何だかわからなかった。まずいことになったという感覚だけが残った。

ところが、その時の部長のK子の反応は素早かった。まさに、電光石火の如く、近くの清掃用具ロッカーから、バケツと雑巾をたくさんもってきて、自ら両手に雑巾をもち、必死に床に広がった尿を吹き始めた。同時に、自分の手は止めずに他の部員に指示を出していた。「他の残ったバケツにも水を汲んできて」「F子をみんなですべてのバケツの端まで運んで」「F子の荷物もってきてあげて」「養護の先生呼びにいった」「男子生徒が来ないように見張って」次から次へと。自分が情けなくなるほど、彼女の采配は見事だった。

生徒会の副会長でもあった部長のK子は、普段の言動をみてもリーダー中のリーダーであったが、人間の真の本性や能力は、不測の事態や危機に直面したときこそ表出されるものだ。彼女のことを「カッコいい」と素直に思った。すべての対応が一段落した後、彼女に怒られた。

「先生、大きな声で怒鳴ればいいってもんじゃないと思います。」猛反省する、カッコ悪い自分がそこにいた。